

ちづる

千鶴（ちづる）さんは、20歳のチャーミングな女の子です。彼女は、知的障がいと自閉症を持っており、母親の久美さんと一緒に暮らしています。

標題の「ちづる」は、千鶴さんとその家族、つまり、母親と兄、そしてバナナという名のトイプードルという、3人と1匹の生活を描いたセルフ・ドキュメンタリー映画です。

監督は、千鶴さんの兄である赤崎正和さんで、立教大学の卒業制作として制作されたものです。

監督であり兄でもある赤崎正和さんは、自分自身を変える覚悟で制作に臨んだといいます。何故なら、彼は、それまでずっと、障がい者である妹の存在を誰にも話せないで来たからであり、「自分が障がい者の兄妹であることを他者の前で認めることで、他人と裸になって向き合えるようになりたい」という思いが、彼を映画制作へと突き動かしたのだと思います。

千鶴さんは、知的障がいを伴った自閉症ということですが、一口に自閉症といっても、一様ではありません。

自閉症いうものを世界で最初に報告したのはアメリカのレオ・カナー博士という人で、博士は自分のクリニックで診察した子どもの症例から、知的障害とは異なる行動パターンがあることに気づき、1943年に自閉症に関する論文を世に出しました。これが、カナー型自閉症といわれるものです。

千鶴さんの場合も、カナー型自閉症と診断されていますが、自閉症というと、この他にアスペルガー症候群とか高機能自閉症と呼ばれるものがありますが、いずれも、何らかの要因で脳に障がいが起こったことが原因と考えられています。

私は、当初、この映画は、一人の障害者を追ったドキュメント、あるいは、障害者に対する理解を深めるための啓蒙的な作品と想像していたのですが、その想像は見事に裏切られました。

千鶴さんと母親が激しくぶつかり合ったり、母親と息子が、彼の就職のことで言い合う場面もあります。

母親である久美さんの存在の大きさに圧倒されますが、しかし、息子と言い合ううちに、息子に向かって涙する場面があり、一方、千鶴さんと距離を置いていた兄は、やがて、千鶴さんの居場所を心配する兄へと成長していきます。

家族3人が、互いに弱さや強さをさらけ出しながら、家族の絆を強め、成長していく、その姿を「ちづる」という映画は、飾らずに表現しています。千鶴さんは、自分の気持ちや感覚に正直に生きています。そして、その笑顔はとても素敵です。そのように彼女を写し取った監督に、妹を見る目の優しさが感じられます。

「自分にとって当たり前存在である家族のことを人と話せるのは、こんなに幸せなことかと日々感じている」と彼はいいますが、そういい切るまでには、相当の葛藤があったはずで。

いまの社会は、障がい者やその家族にとって十分に暖かく、開かれているとはいえません。その意味でも、私は、1人でも多くの人々に、この映画を見て欲しいと思っています。(塾頭 吉田 洋一)